

辛丑十一月十九日既與子由別於鄭州西門之外馬上賦詩一篇寄之 七言古詩
しんちゆう 辛丑十一月十九日 既に子由と鄭州の西門の外に別れ馬上に詩一篇を賦して之に寄す。

- 1 不飲胡爲醉兀兀 飲ざるに 胡為ぞ 酔うて兀々たる
なんすれ 飲ざるに 胡為ぞ 酔うて兀々たる
- 2 此心已逐歸鞍發 此の心 已に歸鞍を逐うて発つ
きあん 此の心 已に歸鞍を逐うて発つ
- 3 歸人猶自念庭闈 歸人猶ほ 自ら庭闈を念ふ
おのずか ていゐ おも 歸人猶ほ 自ら庭闈を念ふ
- 4 今我何以慰寂寞 今我何を以ってか寂寞を慰めん
おん 今我何を以ってか寂寞を慰めん
- 5 登高回首坡壠隔 高きに登りて首を回らせば 坡壠隔つ
はろう 高きに登りて首を回らせば 坡壠隔つ
- 6 但見烏帽出復沒 但だ見る 烏帽の 出でて復没するを
うぼう 但だ見る 烏帽の 出でて復没するを
- 7 苦寒念爾衣裘薄 苦寒に念ふ爾が 衣裘の薄くして
くかん なんじ いきゅう 苦寒に念ふ爾が 衣裘の薄くして
- 8 獨騎瘦馬踏殘月 獨り瘦馬に騎つて 残月を踏むを
そうば 獨り瘦馬に騎つて 残月を踏むを
- 9 路人行歌居人樂 路人は 行ゆく歌ひ 居人は樂しむ
ゆく きよじん 路人は 行ゆく歌ひ 居人は樂しむ
- 10 童僕怪我苦悽惻 童僕は我が 苦悽惻するを怪しむ
わ はなはだせいそく あや 童僕は我が 苦悽惻するを怪しむ
- 11 亦知人生要有別 亦た知る 人生 要ず別有ることを
かなら わかれ 亦た知る 人生 要ず別有ることを
- 12 但恐歲月去飄忽 但だ恐る 歲月 去ること飄忽なるを
ひようこつ 但だ恐る 歲月 去ること飄忽なるを
- 13 寒燈相對記疇昔 寒灯に 相對せし疇昔を記す
ちゆうせき 寒灯に 相對せし疇昔を記す
- 14 夜雨何時聽蕭瑟 夜雨 何れの時にか 蕭瑟を聴かん
やま 夜雨 何れの時にか 蕭瑟を聴かん
- 15 君知此意不可忘 君 此の意の 忘るべからざるを知らば
きみ 君 此の意の 忘るべからざるを知らば
- 16 慎勿苦愛高官職 慎んで 高き官職を 苦しく愛すること勿れ
つし くなはだ 慎んで 高き官職を 苦しく愛すること勿れ

嘗有夜牀對雨之言 故云爾

嘗て夜牀對雨の言有り 故に爾云ふ

嘉祐六年（一〇六一）二十六歳の作。この年、歐陽脩の推薦を受け制科（天子が親しく進士を試問するもの）に応じ三等に入り大理評事簽書鳳翔判官に叙せられた。父の洵は礼書の編纂にたずさわることになっていたので、都に父と弟をのこして任地の鳳翔府（陝西省鳳翔県）へ旅立った。弟の轍は都から西、鄭州（開封と洛陽の間）まで見送って来た。

【語訳】 兀兀：酒に酔った様子。ふらつくさま。猶自：そうはできないことがありながらも、なおそれが可能である気持ち。庭闈：親のいます処。闈は囲まれた室。回首：故郷、みやこ、故国を思いかえりみるのにいう。坡壠：坡は坂。壠は土まんじゅう、田中の高処。二字並べて丘をいう。烏帽：黒い色の帽子。庶民や隠者のかぶるもの。官吏も平服の場合かむった。苦寒：苦は副詞として、はなはたと読む。はげしさをあらわす。衣裳：衣はうわぎ、裘はかわごろも。即ち外套。獨騎：前の句の「念」の内容を前の句で切って、この句は兄、すなわち作者自身のこととも解しえよう。悽惻：かなしみいたむ。要：会（かならず）。いづれそうと定められたものというきもち。飄忽：あわただしいさま。疇昔：昨夜。蕭瑟：しずけさ、さみしき。ここはものしずかなさま。夜牀対雨：かつて懷遠駅（開封のみやこの城外の駅舎であろう場所不明）、にあって韋応物の詩（元常・全真二生に与ふ）の「寧んぞ知らん風雨の夜、復た此に床を対して眠らんとは」の二句に深い感動を覚えたという。

【通釈】 酒を飲んだのでもないのに、どうしてこう酔っぱったようにふらふらするのだろうか。わたしの心がもうすつかり、みやこへ帰ってゆく君の馬の鞍の後を逐って抜け出してしまっているからに違いない。帰ってゆく君はなんととっても親の膝元に戻ることを心頼みにできようが、今私はなにによって心のさみしさを紛らせようか。高みに登ってみやこの方を振り返ってみると、はや一つの丘が遮っていて、馬上の君がかぶる烏帽だけが丘の上にひょっくり出てはすぐまた隠れてしまう。冬の激しい吹雪についての旅に、君の着物が薄くはないかと気にかかり、夜明け前の旅立ちに、ひとり瘦馬に跨って残月の影を踏んでゆく君の姿を想像する。しかし私の眼のあたり、旅人は歌を口ずさみつつ行きかい、家におる人はいとも楽しげである。その中でなぜ私だけがひどく悲しげな顔をしているのかと、しもべたちはいぶかっている。私にしても、人生に別れはつきものということぐらいは知っているつもり、ただ君と別れたまま年月は風のように去ってしまうのではないかと、そら恐ろしく思えるのだ。たよりないともし火の光のもとに向かいあい語り明かした昨夜のことはいつまでも思い出に残るであろう。私たち二人が床を並べて、そぼふる夜の雨の音をしずかに聞ける日はいつになったら来るのだろうか。君もまた、この願いこそ私たちが心にとどむべきものとおわかりであろうが、それならどうか、高い官職を極度に好むことなどないようにしてほしい。